

令和8年 第1回歩こう会 大井田地区を歩く

楽しく歩いて、地域を知ることが出来る



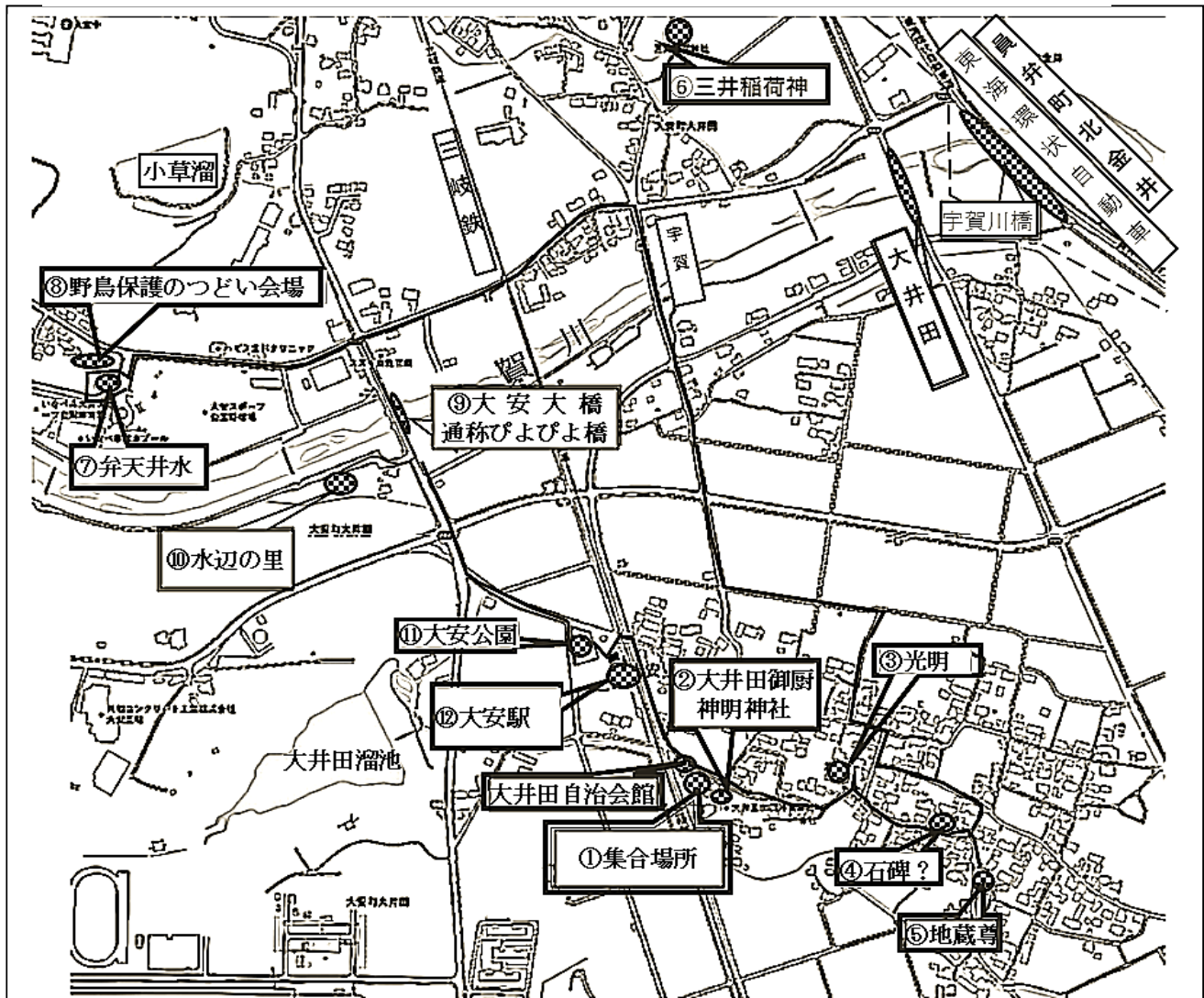
資料作成に当たっての参考資料等

- ウィキペディア」フリー百科事典
- 観光三重資料
- いなべ市観光協会「いなべに行こに」
- 大安町史
- ふるさといなべ市の語り部の会 観光案内
- (公財)高野山文化財保存会 霊宝館資料
- 実用日本語表現辞典
- ヤフーマップ
- コトバンク
- 事典-学研キッズネット

令和8年6月13日
いなべ市シルバー人材センター
歩こう同好会

コース・地点間距離・歩行立寄り時間

	立寄り所	地点間 距離m	歩 行 時間分	立 寄 時間分
	集合場所	0	0	5
1	大井田御厨 神明神社	124	2	10
2	光明寺	169	4	14
3	? 石碑	120	2	5
4	地藏尊	133	3	5
5	大井田三井 稻荷神社	1,390	33	5
6	弁天井水	1,040	22	15
7	大安大橋 びよびよ橋	386	8	5
8	自然水族館	196	4	7
9	大井田城跡	328	7	10
10	梅林公園			
11	大安公園	500	10	10
12	駅・図書館			
13	集合場所	268	14	0
	計	4,386	95	91



1 大安町の生い立ち

大安町に人々が住み始めたのは、先史時代の遺跡(2~1万年)から石器などの生活道具が発掘され、人々が住んでいたことが確認された。

順次それぞれの遺跡等について紹介します。

(1) 先史時代遺跡(2~1万年前)

この時代は、旧石器時代ともいわれ、無時時代、プレ縄文時代とも言われている。この時代の古墳は、田城山遺跡(大井田字小谷口 209 山林室町時代)があり、その他にもこの地区には次の8基の遺跡が発掘されている。

- | | |
|------------------|-------------------|
| ①大谷川遺跡(大谷川) | ②舟臥遺跡(梅戸字舟臥) |
| ③吹上遺跡(梅戸(吹上)) | ④南川遺跡(大井田字南川) |
| ⑤大井田城跡(大井田字小谷口) | ⑥弁天遺跡(大井田弁天) |
| ⑦百合谷遺跡(南金井(百合谷)) | ⑧鶴沢遺跡(梅戸字鶴沢 1400) |

(2) 縄文~古墳時代遺跡

1万年~3千年前を先縄文文化の時代とされ、鈴鹿山脈麓に人が住み始めたとされている。縄文草創期(BC5000頃(旧石器時代で、日本列島が大陸と切離れた時代))頃の土器に縄模様を付けた特徴を示した遺物が発見されており、前期・中期・後期・晩期(この頃弥生時代と重複している)に区分されている。順を追って説明すると、

ア 発見された土器は、三重県内で最初に発見されたもので、丸い棒の表面に楕円や格子状の文様を刻んで、土器の表面を転がして付けた押方文をほどこしたものであった。

イ 石器については、柄の付け根に木や竹に差しして石器を固定する有舌尖頭器は、無時文化の時代から縄文草創期の時代に使われた典型的な石器であり、また、飛び道具の使用が一般化していなかった頃の狩猟用具となっていた。

(3) 前期(BC4000)頃については、人々は活発な行動を繰り広げ、大安町内では中大野(中央ヶ丘)や、松崎(平塚中学校下付近)・奥仙(門前)の諸地域へ、郡内では青川・員弁川を越えて中山(北勢町)や北野(員弁町)の地に生活の舞台を広げた。中大野遺跡は中央ヶ丘の西端にあり、昭和26年三重県で最初の学術的発掘調査が行われた記念すべき遺跡である。この時代には縄文海進がストップして海が退き堆積平野が各地に出来始めた時代である。

気候も変化し日本列島が再び隆起に転じた。人々の生活も進歩し調理具や工具を多目的な機能を持った横型の石匙(いしさじ:黒曜石や頁岩、チャートなどで作った打製石器の一種で、ナイフのように使った)が各地で使われた。

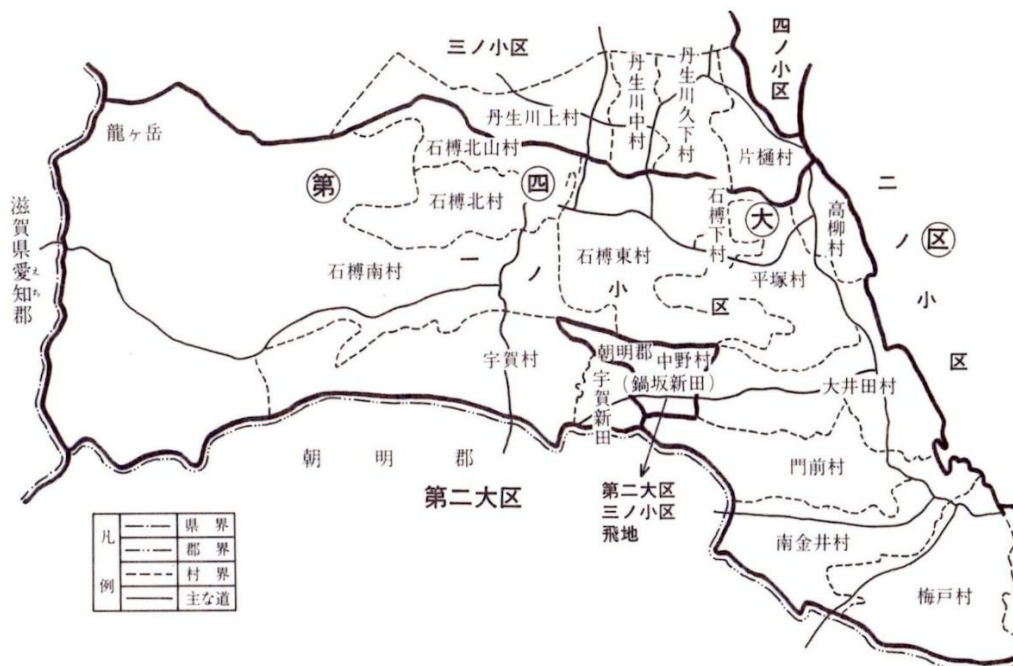
漁に刺し網、衣服の布製作に石錘(せきすい)も多く発掘されている。

(4) 次に野々田遺跡(石樽小学校の南)は、縄文中期(BC3000頃)から古墳時代まで引き続き集落の営まれた大遺跡であった。この時代の特徴としては、生活用具の一つに直径50cm位の浅鉢の土器の底部が発見されている。この土器は、食べ物を煮炊きや、魚や肉・木の実の調理に利用されたものであった。石器については、きれいに磨いた定角式の石斧、乳棒状石斧があり、石錘(せきすい)の使用も相まって、

木工の技術も進歩したと思われる。大量の打製石斧が発見されていることから初歩的な農業の始まりとも考えられるところである。

(5) 次に後・晩期(BC2500 頃)であるが、今から3千年くらい前で

竪穴住居が造られるようになっており、墓地もあった。生活用具としては、石鏃(いしやじり)・石錘・石匙・石斧などの他、たたき石や石皿のような調理用具とみられる道具類が多く発見されている。



(6) 次に弥生時代(BC300 頃)、この時代になると水田稲作が急速に普及した。

この時代の遺跡としては以下の 11 基がこの地区内にある。

- ① 奥仙遺跡(門前字野貝戸 713 畑、南金井字奥仙)
- ② 乳尼畑遺跡(梅戸向野)
- ③ 大貝戸遺跡(南金井字大貝戸 479 水田)
- ④ 小鳥東遺跡(梅戸字向野)
- ⑤ 大欠上遺跡(梅戸字大欠上 1993、19134 畑・宅地)
- ⑥ 鶴沢遺跡(梅戸字鶴沢 1400)
- ⑦ 向野遺跡(梅戸字大欠上、向野)
- ⑧ 西山遺跡(南金井字西山畑)
- ⑨ 下沢遺跡(南金井下沢 319)
- ⑩ 大蓮遺跡(門前字大蓮 1263)
- ⑪ 北川原遺跡(南金井字川原(セキトユ付近))

2 古墳及び遺跡

(1) 古墳

当地域には、以下の古墳が存在したが、その多くは消滅している。そのうち最後の古墳を除き円墳であった。

○野添古墳 大井田字野添 2304 石室を有す 盗掘

○大辻第 1・2・3・4・5・6・7 号墳 山林

大井田字大辻 2151、2084、2087、2100、2104、2154、2136、2137

(2) 遺跡

○南川遺跡 大井田字南川

○大井田城跡 大井田字古谷口

○弁天遺跡 大井田(弁天)

3 明治初頭の大安町の村々

○ 明治 12 年当時の大安町の各村々は上図のとおりであるが、江戸末期に梅戸村(古くは小泉村といていた)の枝郷として門前村と門前笠間

村(笠間小学校の校名の由来となっている)が立村、存在していた。中でも、現在の鍋坂地域は朝明郡中野村の飛地として存在していた。

○ 村の合併問題

明治新政府は、明治 21 年市町村制を公布、村の合併に当たって員弁郡長は、梅戸・南金井・門前・大井田を合わせて「梅津村」にする案を示した。

大井田以外の 3 村は、古くから梅戸郷であったが、村名に当たっては、「旧来の名称に関係のない名称にするべき同意をしてが、梅戸村がひそかに門前、南金井を誘い「梅戸」案に賛成させたことで、大井田村は同意できないとし他の 3 村との間で一致点が見いだせなかった。

大井田村からは、佃村又は四里村を提案、梅戸案と対立した。

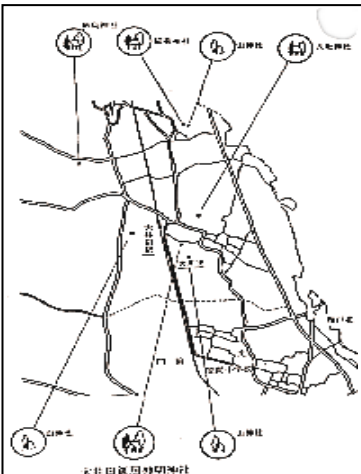
郡長から、「梅戸」に大井田の「井」の字を加え「梅戸井村」を新称とした。

その他の大安町には、三つの村(高柳・平塚・石樽下村)が合併し「三里村」に、丹生川上村・中村・久下村と片樋が合併し「丹生川村」に、石樽南村・宇賀村・宇賀新田・鍋坂新田が合併し「南石加村」に、石樽東村・北村・北山村が合併し「北石加村」と区域と名称が決定した。明治 22 年からは「鍋坂」は「大字中村」と称していたが、大正 3 年「鍋坂」に改称された。

4 大井田御厨神明神社 大井田字南川 1169



神鳳抄(伊勢神宮(内宮および外宮)の領地の諸国一覧表)に伊勢神宮へ毎年元旦のお祭り用に米 10 石を収めていたという記録が残っており、神宮の神領地としてこの地に天照大御神を祭る社が建てられていたのである。



昔は村の北に「北の宮(たけの宮、天王さんともいう)」、南に「新宮(春日神社ともいい天照大御神、天児屋根命(あまのこやねのみこと)※1、菅田別命、大山祇神を祀る)があったが、明治 22 年(1889)神宮を大井田御厨神明神社と社名を変えた。

伊勢輯(しゅう)雑記に、「春日神社。俗に神宮という。祭神は 5 座、天照大御神・八幡宮・観音菩薩※2 他 2 座。拝殿あり、石灯籠 2 基拝殿の前にあり、社殿東向、村の産土神(うぶすながみ)※3 なり」、又「牛頭天王社(ごずてんのうしや)※4 が村の北の田の中にあり、当社は古い社で、古城主出口右近の氏神で、昔境内は悉(ことごと)く竹藪であったので竹の宮という」とあり、「巖島

神社文久 3 年(1863 : 121 代孝明天皇、14 代将軍徳川家茂の時代)旱魃のため稲の枯れんとするのを、村民議して字砂具道(すぐどう)に池を穿ち(うがち: 池を構築)し、清水大いに湧出て蘇生す。依って池頭にこの社を建立す」と記録が残っている。明治 40 年(1907)村内各所にあった次の神社を合祀した。

- 無格社 八幡神社(字見上 729) : 牛頭天王社とも言い素佐之男命を祀る。
- 同 巖島神社(字砂具道 2704) : 弁天とも言う。市寸島姫命を祀る。

○ 同 山神社(字江丸 1240) ○無格社 山神社(字江丸 1080)

※1 天兒屋根命：春日権現、春日大明神とも呼ぶ。岩戸隠れの際、岩戸の前で祝詞を唱え、天照大神が岩戸を少し開いたときに太玉命とともに鏡を差し出した。天孫降臨の際瓊瓊杵尊(にぎにぎのみこと)※5 に随伴し、古事記には中臣連(なかとみのむらじ：神事・祭祀を司った中央豪族で、古くから現在の京都市山科区中臣町付近の山階を拠点としていた)の祖となったとある。名前の「コヤネ」は「小さな屋根(建物)」、または「言綾根(ことあやね：祝詞(のり)を美しく奏上すること)」のことで、託宣(たくせん：神仏が人に乗り移り、夢の中に現れたりして、その意志を告げること)の神の居所と考えられる。

※2 観音菩薩：仏教の菩薩(仏の位の次にあり、悟りを求め、衆生を救うために多くの修行を重ねる者)の一尊。観世音菩薩または観自在菩薩ともいう。救世菩薩(くせぼさつ・ぐせぼさつ)など多数の別名がある。一般的には「観音さま」とも呼ばれる。また、観世音菩薩には 33 身の菩薩さまがあり、当神社の菩薩が誰か分からない。

※3 産土神：神道において、その者が生まれた土地の守護神を指す。

※4 牛頭天王：神仏習合の神。釈迦の生誕地に因(ちな)む祇園精舎の守護神とされた。蘇民将來說話※6 の武塔天神(牛頭天王の別名)と同一視され薬師如来の垂迹(すいじやく：神仏が、衆生を救うため余に現れること)であり素戔嗚尊の本地とされた。

素戔嗚尊は、身長が 7 尺 5 寸、3 尺の牛の頭をもち、また、3 尺の赤い角もあった。太子は王位を継承して牛頭天王を名乗るが、后を迎えようとするものの、その姿形の怖ろしさのために近寄ろうとする女人さえいない。牛頭天王は酒びたりの毎日を送るようになった。



山野に狩りに出掛け、そのとき一羽の鳩が現れ、大海に住む沙掲羅(さから)龍王(八大龍王)の娘のもとへ案内され龍宮へ赴いた牛頭天王は、沙掲羅の三女を娶った。

牛頭天王は、京の祇園社の祭神であるところから祇園天神とも称され、平安時代から行疫神(ぎょうあくじん：疫病神)として崇め信じられてきたが、御霊信仰(ごりょうしんこう)※7 の影響から当初は御霊を鎮めるために祭り、やがて平安末期には疫病神を鎮め退散させるために花笠や山鉾を出して市中を練り歩いて鎮祭するようになった。これが京都の祇園祭の起源である。

※5 瓊瓊杵尊：天照大神の孫。天忍穗耳尊(あまのおしほみのみこと)の子。

天照大神の命令で、葦原の中つ国を統治するため、日向高千穂峰に天降ったとされる。木花開耶姫(このはなのさくやびめ)を妻とし、彦火火出見尊(ひこほほでみのみこと：神武天皇の諱であり、山幸彦)を生んだ。

※6 蘇民将來說話：各地に伝わる説話、及びそれを起源とする民間信仰である。今日でも「蘇民将来」と記した護符は、日本各地の国津神系の神(主にスサノオ)を祀る神社で授与されており、災厄を払い疫病を除いて福を招く神として信仰される。また、除災のため住居の門口に「蘇民将来子孫」と書いた札を貼る家も少なくない。

※7 御霊信仰：人を脅かすような天災や疫病の発生を、恨みを持って死んだり、非業を遂げた人間の「怨霊(おんりょう：仕打ちに恨みを持ち、たたりなどをする、死霊または生霊のこと)」の仕業とみなして畏怖(いふ：恐れおののく)し、これを鎮めて「怨霊」とすることにより祟(たた)りを免れ、平穏と繁栄を実現しようとする日本の信仰のことである。

(2) 神社建築



神社は本殿と拝殿があり、その他に門や鳥居がつく場合が多い。鳥居の位置が遠く離れているものも多く、大井田の御厨神明社のみは門がある。正面三面に縁をめぐらし高欄を置き、高欄は木階の両脇に設けられ、社殿の側面縁の後端に脇障子を立てる。次に少数ながらも神明造りがある。全て直材、円柱柱を用い、斗組はなく屋上に千木(ちぎ：社殿の屋根の両端の所で、交差し高く突き出ている部分)・勝男木(草ぶきの屋根が風に飛ばされないように、棟と構造体をつなぐ部材として用いられたと考えられるが、のちには社格や権威の象徴のために用いられるようになった)をあげる。いま一つは、寺の本堂と似て桁行(けたゆき：間口)三間・梁間(はりま：奥行)三間に入母屋造りの屋根を揚げた物である。前面或いは正側三面に縁・高欄を廻らし、後方の見切りに脇障子を立て前面に階段を置き、その上に屋根をおろして向拝(こうはい、ごはい)※を作る。

※向拝：日本の寺院・神社建築において、仏堂や社殿の屋根の中央が前方に張り出した部分のこと。仏堂や社殿入口の階段上に設けられることが多いことから「階隠(はしかくし)」ともいう。

5 真動山 光明寺 大井田字南川 1133

○ 宗派 浄土真宗本願寺派



○ 沿革 開基の頃(文禄元年：1593：106 代正親町(おおぎまち)天皇：豊臣秀吉の安土桃山時代)青蓮寺(勝蓮寺)と号し大井田字真動山の地にあったが、当時の住僧积了意が本願寺門主顕如上人(けんによしょうにん)※に深く帰依し、文禄4年(1595：107 代後陽成天皇、安土桃山時代)現在の地に移り、堂宇を建立して当寺名となった。

※顕如：戦国時代から安土桃山時代の浄土真宗の僧。浄土真宗本願寺派第11世宗主・真宗大谷派第11代門主。大坂本願寺住職。顕如は号で、諱は光佐、法主を務めた寺号「本願寺」を冠して本願寺光佐とも呼ばれる。院号は信楽院。法印大僧正、准三宮。生年月日天文12年(1543：105 代後奈良天皇、13 代室町幕府將軍足利義輝。戦国時代)3月2日
死亡日天正20年(1592：後陽成天皇)12月27日。

○ 主要な寺宝・安置佛

- ・阿弥陀如来立像
- ・親鸞聖人御絵像
- ・聖徳太子御絵像 共に延宝7年(1679：112 代霊元天皇、4 代將軍徳川家綱)
- ・蓮如上人御絵像 伝来不詳

蓮如は室町時代の浄土真宗の僧。浄土真宗本願寺派第8世宗主・真宗大谷派第8代門首。大谷本願寺住職。諱は兼壽。院号は信證院。

法印権大僧都。本願寺中興の祖。同宗旨では、「蓮如上人」と尊称される。明治15年(1882)に、明治天皇より慧燈大師(えとうだいし)の諡号を追贈されている。しばしば本願寺蓮如と呼ばれる。

○ 主要建物

本堂 文禄元年(1592)建築、明治37年(1904)頃再建

鐘楼 慶応元年(1865)建設



当寺の鐘楼は、下層は袴越しといって、城の石垣の輪郭のようにそりを持つ板張りの化粧で、下の柱を隠しており、上層は四周に縁が廻りそれを支えるために斗組が組まれ、上層の柱は円柱で深い軒が斗組で支えられており、派手な造りとなっている。

・ 鼓楼

嘉永元年(1848)建設 ・ 山門 天保年間 建設



○ 親鸞聖人旅姿立像

銅像の台座に「もし人、無上菩薩心を発せずして、ただかの国土の受樂 無間なるを聞きて、樂のためのゆえに生まれんと願ずるは、また当に往生を得ざるべきなり。親鸞(無量寿の生命観)の一説である」と親鸞の言葉が銅板ではめられている。

昭和63年9月に設置されたものである。

6 ?石碑



乃木希介が学習院学長に就任したことにより、学習院で明治天皇が野立てを計画、其の地に、日本国中から集められた石をもって壇を築き、これに神木を植栽し院の中心とされ名付けて榊壇という東都の一つとなった。

名勝となる伊藤昇氏の長男が学習院で学ぶ縁により、其の一枝を試しに挿木したところよく生育したので、大井田の此の地に一榊壇が送られる。

日本が国際連盟を脱退(昭和8年(1933))した時に、次のように「自立の態度を確立し大いに皇道を世界に登場すべき秋になれば君の此の企ては、その意味深しと云はざるべからず」と締めくくり、昭和8年文学博士紀平正美氏が揮毫し此の碑が建立されたものである。後ろの桜はその時に植栽されたものと思われる。

7 南无地藏尊大菩薩



南无：今は簡体字(1950年代に中華人民共和国で制定された、従来の漢字を簡略化した(略字)字体体系である)となっておりますが、古代から通用の文字です。後漢の「説文解字」という辞書に「無、无奇字、西北爲无」とあり、中国西北地方で使われていた文字であることが分かります。日本でも筆記時代には略字としてよく用いられています。

尤は別字。岩波『仏教辞典』によれば、「南無とは、サンスクリット語 namas, namo, namah の音写で、<なも>とも読み、敬意を表すために体を折り曲げること、“帰依”、“帰命頂礼”を意味します。佛法僧の三宝に対して<ナムサン・南無三宝>、略して南無三、危機に際して佛

菩薩に救護を祈念する場合に用いられることが多く、危険や失敗に驚く時に発する感動詞的表現ともなった」とあります。

寺の本尊は像ですが、ご家庭の仏壇の中のご本尊の多くには、阿彌陀仏の絵像か南無阿彌陀仏の掛軸が拝む対象として祀ってあります。漢字で書かれたその掛軸については、いつものことですが、深い意味を考えたことはほとんどありませんでした。しかし仏具通販冊子の本尊掛軸の写真を見て、不思議な感覚を覚えました。いつもは何となくページをめくるのですが、その通販の印刷掛軸には、親鸞書と思われる「南無阿彌陀仏」と蓮如上人の書と思われる掛け軸「南無阿彌陀仏」の2点があり、思わず目が止まりました。

親鸞聖人書の方は、「南无」の「无」は「無」の旧字ですが、掛軸全体のバランスから見て「南无」が非常に大きく強く、「无」が右に跳ねるように書かれており、下の「阿彌陀仏」がこぢんまりと普通に書かれていて、阿彌陀に南无と、何かに訴えるというか、強い信念が強く「阿彌陀佛」に懸かっているのではないかと感じられたのでした。

「南无」と大きく書いたためその下のスペースが無くなったので、残されたスペースに合わせて「阿彌陀仏」を小さく書かれたとは思われません。

「南無」とは、古代インドの言葉であるサンスクリットの「ナマス」、あるいはその変化型の「ナモー」という音を、そのまま伝えて漢訳したもので、「南」とか「無」などの漢字自体の意味とは関係はありません。「ナマス」とは「帰依する」「帰命する」、つまり根本として従う、それほど大事に敬うという意味があります。

印度(インド)の国に行かれた方は、その国の人びとが合掌して、「ナマス・テー」と挨拶する光景を御覧になられたことがあるでしょう。



これは「あなたに敬礼します」という親愛と尊敬を込めた言葉で

阿彌陀様なら、「南無阿彌陀仏(なむあみだぶつ)」

お薬師様なら、「南無薬師瑠璃光如来(なむやくしりりこうによらい)」

観音様なら、「南無観世音菩薩(なむかんぜおんぼさつ)」

お釈迦様なら、「南無釈迦牟尼如来(なむしゃかむにによらい)」等となる訳です。

お地蔵さまに礼拝する時は、「南無地蔵菩薩」と心に念じます。お地蔵さまと言えば、最も身近に感じる親しみのある菩薩さまであります。「地の蔵」と書くように、お地蔵さまは大地から色々なものを供給して下さっています。例えば、燃料となる石油、鉄・金・銀などの金属類、水・米・野菜等の食料、材木・セメントなどの建築用材などあらゆるものが大地から生成されています。この大地の貯蔵庫がお地蔵様であり、また、大地の底のような真暗闇の世界、つまり地獄をあてもなくさ迷い、苦悩し、自分の力ではどうしても抜け出ることのできないものを救済し、光に導き、仏さまの世界に、お悟りの世界に導く、生とし生けるものへの抜苦与樂の仏道修行をされているのであります。

このように、お地蔵さまのご修行に倣って、日々の生活が何不自由なく生活の糧を与えていただいていることを感謝するとともに、地獄で苦しみ、悩み、さ迷っているものに、少しでも力をお貸しすることのできる生き方をしますと誓いを立てるのが、「南無地蔵菩薩」なのです。表題の南無の「无」は、亡の異体字であり何もないということで、「無」の事が充てられる。

8 飛地境内社



当社は、大井田御厨神明神社の飛地境内社として大井田字坂郷(三井)2877番地に鎮座する稲荷神社である。相殿に神明社と山神社を祀っている。祭神は、以下の三神が祀られている。

○ 宇迦之御魂命

名前の「宇迦」は穀物・食物の意味で、穀物の神である。また、宇迦はウケ(食物)の古形で、特に稲霊(いなたま：稲の穀霊の意で、初夏の雷光によって穀霊が成長し孕(はら)むという信仰から転じての呼ばれる方)を表し、御は神秘・神聖、魂は霊で、名義は「稲に宿る神秘的な霊」と考えられる。記紀ともに性別が明確にわかるような記述はないが、古くから女神とされてきた。

本命は、伏見稲荷大社の主祭神であり、稲荷神として広く信仰されている。ただし、稲荷主神として宇迦之御魂の名前が文献に登場するのは室町時代以降のことで、伊勢神宮ではそれより早くから、御倉神(みくらのかみ)として祀られた。

○ 天照大御神

天照大御神も天照大神も同一神である。

日本神話に主神として登場する神。女神と解釈され、高天原を統べる主宰神で、皇祖神とされる。記紀において、天照は太陽神の性格と巫女の性格を併せ持つ存在として描かれている。

太陽神、農耕神、機織神など多様な神格を持つ。また延喜式(えんぎしき)※では自然神として神社などに祀られた場合の天照は「あまてる」と称されている。天岩戸の神隠れで有名な神で、神社としては伊勢神宮内宮が特に有名。

別名、大日靈貴神(おおひるめのむちのかみ)、日女尊とされている。

記においては天照大御神という神名で統一されているのに対し、紀においては複数の神名が記載されている。伊勢神宮においては、通常は天照大御神の他に天照皇大神、あるいは皇大御神(すめおおみかみ)と言い、神職が神前にて名を唱えるときは天照坐皇大御神(あまてらしらすめおおみかみ)と言う。

※延喜式：平安時代中期に編纂された格式(律令の施行細則)で、三代格式

(さんだいきやくしき：平安時代に編纂された弘仁格式、貞観格式、延喜格式の三つの格式(律令の補助法令・いわゆる取説)の総称)の一つであり、律令の施行細則をまとめた法典のこと。三大格式の内、現在存在しているのは延喜式のみ。

○ 大山咋神(おおやまくいのかみ)

先代旧事本紀(せんだいくじきほんき)、地祇本紀(ちぎほんき)※1では大山咋神

と表記し、記では別名を山末之大主神(やますえのおおぬしのかみ)と伝える。

大年神※2と天知迦流美豆比売(あめしるかるみづひめのかみ)※3との子である。

名前の「くい」は杭のことで、大山に杭を打つ神、すなわち大きな山の所有者の神を意味し山の地主神であり、農耕(治水)を司る神とされる。記では、近江国の日枝山(ひえのやま：比叡山)及び葛野(かづの：葛野郡、現京都市)の松尾に鎮座し、鳴鏑(なりかぶら：矢の先につける発音用具)を神体とすると記されている。なお、大山咋神は里山に鎮まるとされることから、記の日枝山とは比叡山全体というより、里山である八王子山(比叡山の一部)を指すとする説もある。

※1 地祇本紀：先代旧事本紀全 10 巻のうち第 4 巻の篇名であり、出雲神話や国津神(地祇)に関する系譜・伝承をまとめた部分を指す。

※2 大年神：須佐之男命と神大市比売の間に生まれた大年神としてゐる。両神の間の子は他に宇迦之御魂神がおり、これも穀物神である。また、大年神と香用比売(かよひめ：出自等不明)の間の子に御年神(みとしのかみ、おとしのかみ)、孫に若年神(わかとしのかみ)がおり、同様の神格の神とされ毎年正月に各家にやってくる来訪神である。地方によってはお歳徳(とんど)さん、正月様、恵方神、大年神(大歳神)、年殿、トシドン、年爺さん、若年さんなどとも呼ばれる。

※3 天知迦流美豆比売：古事記大国主条の、大年神の妻神で水の女神であること。天(あめ)領(しるかる)瑞日(みづひ)女(め)で、生命力に満ちた太陽の女神とする説がある。

9 新田開発と井水

(1) 大井田中井水(弁天井水)



文久 3 年(1863：121 代光明天皇、12 代将軍徳川家茂、18 代桑名藩主松平定敬(さだあき)の時代)現旧大安庁舎前内に湧水を発見し、深さ 2 間・長さ 100 間の堀割をつくり、また、伏越(ふせこし・ふせごし：木や石の桶を地中に埋め、逆サイフォンの原理で交差する川を潜って水を送る仕組み)を作り宇賀川の下を通し、大井田の田を潤した。記念して弁天庭園を築造した碑がある。

碑文内容は以下の通り。

文久年間(1861 年から 1864 年までの期間：121 代光明天皇、13 代将軍徳川家茂、桑名 18 代藩主松平(久松)定敬幕末の時代)故因善六郎翁この地に池を掘り上井水を構築されたために後世の大旱魃に洩も凶作を免れたいという大井田地区農民はここに水神様を祀り報恩感謝の意をこめて年毎に弁天の祭礼を行い併せて翁の遺徳を今の世に伝えているのである。この大安町弁天スポーツ公園建設にあたり弁天の森の聖池は宇賀村の川替えにより水源は涸渇し湧水池導水溝とも老朽化していることに憂え上流に新しく水源を求め池頭に導水し湧水導入溝に六十糎集水管四百米を敷設をし往時に勝ち水量をえることに成功大井田地区水田の灌漑用水を確保したのである。こうして先人の手になる弁天用水を昔のままの後方で大きく修復に昔日の面影を残しながら周囲の林を切り開き弁天庭園を築造町民憩いの場とすることが出来たのである。当町にと

って歴史的文化的に由緒ある聖地が町民の心触れ合い交友の場となることを念願するものである

大安町長 萩野黎治郎

(2) 大井田下井水

明和元年(1764:117代後桜町天皇(女帝)、10代将軍徳川家重、10代桑名藩主松平忠啓(ただひら)の時代)大井田村の庄屋出口嘉兵治が大井田村の東部・宇賀川と員弁川の合流点当たりの荒地に、三笠橋付近より用水を通し宇賀川を横断する用水路を作った。

(3) 新田開発と水利

戦国時代には農民は絶えず物資運搬等のために徴発(ちょうはつ:国家や軍隊などの公的機関が戦争や非常時に、民間の物資・車両・家屋・労働力等を強制的に使役や牛馬を取り立てられること)され、家屋は焼かれ田畑は踏み荒らされるのが、戦乱の常であったが、戦乱がなくなると農民も生産意欲が高まり、領主の政策とも相まって農業生産が著しく向上した。

農業生産増大の主な要因は新田開発による耕地面積の増加であった。新田開発は領主も積極的に奨励し、初期には富力ある農民がそれにあたり、幕府や藩の事業としても行われ、のちには町人や富裕な農民も資本を投じて行なうものも多くなった。

10 大安大橋 通称「ぴよぴよ橋」



多くの人に知られていない、まさに通好みの場所と言え、鳥のデザインがあしらわれ、地元の人たちにはピヨピヨ橋と呼ばれていた。昔は音声が流されていたが、今は停止している。

この橋が架設された経緯は、橋の入口の橋名盤が設けられた下りの通りである。



昭和61年5月11日 常陸宮正仁殿下・妃華子(ご成婚昭和39年)をお迎えし、「第40回全国野鳥保護の集い」が此の地で開催されることは誠に光栄の至りである。これを記念して永遠に大安町の誇れる静かな自然生かしながら、野鳥とも共存できるやすらぎの地域社会を創造していきたいとの願いをこめてカーデンプリッジを架設する。

11 いなべ市水辺の里公園



この公園は、地域用水事業大井田西部地区が、親水景観の保全、生態系の保全のために、従来の農業水利施設を改修・整備されたものです。宇賀川の上流域の環境を再現した水路では、水族館のようにガラス越しに泳ぐ魚を横から見られるようになっている。

その他、溜池、土水路、湿地はこの地域にあるものをイメージして整備されました。また、自生樹木を生かし地域の樹木を植樹して、「地域の自然環境を学習する場」として自然環境を





学習する場」として活用できるように整備された。いなべ市にあるこのスポットは水族館という名がついていますが、皆さんが思い描くのと少し違うのではないのでしょうか。ここは、まさかの野外。しかも、木々の生い茂る中であって、むき出し感満載です！。右は展示室と魚の映像。

12 梅林公園 大井田城跡梅林の会



大安町ふるさと景観事業は、竹下内閣の時全国市町村に「ふるさと創生1億円」が交付され、大安町において設けられた事業で、各地域からそれぞれの事業計画を精査し地域の史跡、景観や歴史的な遺構、地域に貢献された歴史的な人物等、地域で守るべき歴史等を保存するために整備された一つが、此の梅林公園です。

この梅林(藤田家所有)を整備することにより、歴史ある大井田城跡を次世代へ引継ぎ、町民全体のやすらぎの場とすることを目的とされています。

13 大井田城跡 大井田字小谷口



大井田城の詳細は不明。栗田左衛門佐の居城もしくはその家老・因入道道信が城主を務めたと伝わっている。また、文明5年(1473:103代後土御門天皇、室町幕府8代将軍足利義政)頃に美濃の齊藤氏が攻め寄せた際に北伊勢衆が一ヶ月余りにわたって防戦につとめた城ではないかとされています。現在城跡は「大井田城跡梅林公園」として整備されており、本丸跡の西側には土塁と空堀が、南側にも高い土塁が残っている。曲輪(くるわ:城の内外を土塁、石垣、堀などで区画した区域)内は梅林となっている。なお、当跡地には彰徳碑(広く世に名を知らしめる為に建てられている石碑)が建立されている。

伊勢輯雑記によると、永禄11年(1568:106代正親町(おおぎまち)天皇、室町幕府15代将軍足利義昭の時代)織田信長の北勢攻略によって落城の悲運に遇ったと考えられているが、大井田城の築城と落城の時期は定かではない。

大井田城跡は梅林公園となり、規模は小さいものの比較的遺構がよく残っている。主郭の西側下は藪になっているが、土塁と空堀が確認できる。

主郭南側には断続する土塁が残り、土塁内側に井戸跡がある。

大井田城は、宇賀川の南岸に沿って東へ伸びた丘陵の先端に築かれている。

東西約380m、南北約240mの範囲に小規模な土塁や堀で区画された多数の居館跡が連担している。西方が丘陵続きとなるため、空堀と土塁で遮断し、その他は急斜面の要害地形である。先端部は中央に西に向かっ

て谷が入り込み二股に分かれ、北側の先端に主郭と思われる広い郭が置かれている。

大井田城も城郭部と家臣屋敷が同一平面上に設けられた構造と考えられる。

14 駅前公園



ふるさと景観施設支援事業の一環として設置されている。



大安町では、昔宇賀川・鈴鹿山系より良質の白御影石が沢山採れ多くの石材業者がいました。駅前公園の一角にある御影石の「灯籠」が設置され、この白御影石を、もう一度多くの人に知ってもらおうと大安町の玄関でもある大安駅にこの灯籠を設置。大安石材友の会として全員が技術を終結し、景観をそこなわないように、シンプルにかつ斬新なデザインで製作しました。

平成 11 年 3 月設置。右写真は、駅前公園の様子。

15 大安町中央図書館



図書館が本格的に整備されようと動き出したのは、文化会館の一角にできたのが其の始まりである。それ以前は石加村公民館に「図書室」があり 500 冊程度蔵書し利用されていた。

中学校、各小学校では新しい校舎建設に伴い、順次図書室を設けられ利用されてきた。

昭和 57 年から地区自治会で、図書館建設を行うと「一百万円」の補助を出すこととし大井田地区を第一号に、八箇所で行われた。

大安町では、三岐鉄道大井田駅の老朽化に伴う駅舎の建替と、地元通勤者の自転車置場の整備が要望されたのを機に「どうせ建替えるなら自転車置場も、駅もコミュニケーションの場も作りたいとの考えから、図書館と駅とを合わせて作ったら・・・」ということで大安中央図書館が建設された。

駅舎と共同利用という発想は「駅で本がよく売れる」「電車の中で本をよく読んでいる」「それなら駅で本を貸してみたら・・・」これが発端であった。

この利用についての目的は、図書館本来の目的である「生涯教育の場」としたいのである。例えば親子で連れ立って読書に来ることによる親子このふれ合いの場として、また、通学・通勤の途中の読書の場所として学生や一般人と広く利用されるよう期待され開設されたのである。

16 三岐鉄道三岐線

富田駅～三岐朝明信号場間は貨物列車専用であり、旅客列車は近鉄富田駅～三岐朝明信号場間の近鉄連絡線を通り、全て近鉄富田駅発着となっている。

全線単線の電化路線である。旅客輸送を行っているほか、富田駅～東藤原駅間でセメントを中心とした貨物輸送を行っている。日本において JR 以外でセメント輸送を行う鉄道事業者は三岐鉄道のほかにもあったが、西武鉄道が平成 8 年(1996)に、秩父鉄道と樽見鉄道が平成 18 年(2006)にセメント輸送を廃止して以降は本路線のみとなっている。

旅客列車には、西武鉄道の中古車両が黄色とオレンジ色のカラーリングを施され使用されている。貨物輸送の割合が大きい、通学・生活路線として、また鈴鹿山脈へのハイキングの足などとして旅客輸送の比率も高まっている。

富田～西藤原間 26.5km(富田～三岐朝明間 1.0km は貨物営業のみ) 直流 1500V。

(1) 三岐鉄道の発足

当路線は鉄道敷設法別表 75 項「三重県四日市ヨリ岐阜県関ヶ原ヲ経テ滋賀県木ノ本ニ至ル鉄道」の一部を形成し、「三岐鉄道」という社名も三重県四日市と岐阜県大垣市上石津を経て、関ヶ原とを結ぶことを目指したことによるものであった。

昭和 3 年(1928)藤原鉄道に対し四日市市～関ヶ原町間他の鉄道敷設免許状が下付され、三岐鉄道に名称を改め会社を設立。社長は三重県の実業家伊藤伝七が就任し、取締役には浅野セメント(浅野財閥)から専務取締役の浅野良三、金子喜代太が、浅野財閥系の鶴見臨港鉄道から取締役の山田胖が、小野田セメントから専務取締役の狩野宗三が名を連ねた(浅野セメント・小野田セメントとも現在の太平洋セメントの前身)。

(2) 三岐鉄道三岐線概要

全線単線の電化路線である。旅客輸送を行っているほか、富田駅～東藤原駅間でセメントを中心とした貨物輸送を行っている。日本において JR 以外でセメント輸送を行う鉄道事業者は三岐鉄道のほかにもあったが、西武鉄道が平成 8 年(1996)に、秩父鉄道と樽見鉄道が平成 18 年(2006)にセメント輸送を廃止して以降は本路線のみとなっている。

旅客列車には、西武鉄道の中古車両が黄色とオレンジ色のカラーリングを施され使用されている。貨物輸送の割合が大きい、通学・生活路線として、また鈴鹿山脈へのハイキングの足などとして旅客輸送の比率も高まっている。

西武 701 系電車-ED45 形電気機関車-東武 ED5060 形電気機関車。

(3) 歴史

昭和 6 年(1931)7 月 23 日に富田～東藤原間が開業し、同年 12 月 23 日に東藤原～西藤原間が延伸開業したものの、昭和 12 年(1937)に西藤原～関ヶ原間の免許が失効し、現在に至っている。

17 常陸宮妃華子殿下の和歌

野鳥くる 実のなる木々に うゑかへて 君は若かるる 庭師と語る
(背景)

この和歌は、常陸宮妃華子様(1914-2000)が 47 歳の時、昭和 62 年の歌会始のお題「木」でお読みになった和歌である。

